

「お母ちゃんは、発達しない心理学者でしょう!？」

これは前著『発達の芽をみつめて』の冒頭の文章です。六歳だった息子暁夫が、発達心理学専攻の私を「発達しない心理学者」、教育学専攻の夫を「ウソ学者」と呼びビクリさせたのは、もう二二年も前のことになります。

『発達の芽をみつめて』を出版したのは一九八九年でしたが、その後毎年のように増刷を重ね、多くの方に読んでいただきました。でも振り返ってみると、一九八九年に生まれた子どもたちが、大学に入学してくるようになっていくのです。月日がたつのは早いのですが、その間に私は「そんなことないで、お母ちゃんは発達してるでえ」と暁夫に言えるような日々を送ってきたでしょうか。

前著を書いたのは、大学の在外研修を活用して保育所に通っては一歳児を観察していた一九八八年でした。発達心理学者らしく、子どもを観察しデータをとり分析していた日々の中で、子どもの発達について考えていました。息子も小学校低学年で、生活と仲間を広げて充実した日々を送っていました。だから発達心理学者らしく、子どもの発達研究を中心に据えてものを考えて本を書いたように思います。

ところがその後の二〇年余りは、「発達しない心理学者」どころか「発達研究をしない心理学者」として生きてきました。私が発達心理学を専門にしたのは、障害のある乳幼児

のこころを理解したい、彼らの発達を保障したい、という願いからでした。だから一九七三年以来、大学院で学んでいた間も、そして日本福祉大学に就職してからも、一貫して保健所で一八か月児健診後の発達相談を担当し、障害があると思われる子どもたちと関わりつづけてきました。しかし、障害があると思われる子どもたちを発見しても、その子どもたちが生き生きと通える場が広がっていかねば、ただ子どもにレッテルを貼っているだけにすぎないのではと思えてイヤになったこともありました。発達心理学を研究している人たちが、健診とその後のフォローを通して子どもの障害の兆候に関して研究している論文を読んでも、心理職がフォローするよりも地域に通える場を築く方が子どもや父母の力になるのではない、心理学研究に嫌気がさすこともありました。子どもの発達過程をいねいに追っていくことはとても楽しいワクワクする体験なのですが、一人ひとりの親子に充実した日々を保障することの方がもつとステキではと思えて、心理学研究者としての自分の道に迷う日々もありました。

そんな私に転機が訪れたのは『発達の芽をみつめて』が出版された一九八九年の夏だったと思います。全国障害者問題研究会が全国の障害乳幼児施策の実態を調査することを計画し、実態調査の実行委員会の責任者を任されたのです。そのことを機に、地元愛知でも調査実行委員会を結成し調査に協力するとともに、障害乳幼児の関係者が共同で学習交流

するという機運が高まり、それまで以上に保育者や通園施設関係者との関係が深まり、障害者運動や保育運動にのめり込むようになりました。またこの調査を通して、全国の自治体の療育格差もまざまざと見せつけられ、真に一人ひとりの親子を護^{まも}るためには、実践を充実させるだけでなく日本中どこに生まれても充実した療育が保障されるような制度や仕組みを築かなくては、子どもが幼い時期の父母が声を上げにくいからこそ障害乳幼児と関わる関係者がしっかりと手をつないで運動を展開しなくては、と気持ちが高揚していきました。

たぶん発達心理学者としては横道にそれたことになるのですが、障害児のこころを理解したいと発達心理学を学んだ初心からすれば、「障害児とその父母のため」という思いはより発展したのだと思っています。だから職場でも、学生たちと障害者問題を学ぶサークルをつくったり、学生たちが志を高くもてるような大学でありつづけてほしいと学生部長や教職員組合委員長を歴任し、忙しく過ごしてきました。そして現在は、新たな制度や仕組みを築くうえでは、厚生労働省の人たちをはじめとする行政関係者に、子どもの発達や親の思いを実感してもらえようようなデータを提供することが必要だということもよくわかってきました。そんな視点から研究者としての力を生かせたらと最近は思っています。

研究者としての方向転換はもとより、この二〇年あまりの間は、私生活においても人間の生きていく意味を感じさせられるドラマのあった日々でした。幼いときから葛藤を抱えてきた母が亡くなり、介護を必要とした父も亡くなり、そして結婚三五周年を迎えた夫がガンとの三年半の闘いの末に六一歳で人生を終えてしまいました。子どもが発達することはもとより、大人の発達とは？ アルツハイマーになった父の発達とは？ 人間が生きて死ぬということの意味は？ いろいろと学ばされ、「私なりに発達してきた」と思うのですが、夫のように病に向き合い『般若心経』や『歎異抄』を読むほどには枯れてはいませんし、悟りも開いていません。

でも五〇代終わりの今だから考えられる人間の発達の本質があるのではないかと思い、結婚三五周年の記念に『続 発達の芽をみつめて』をまとめてみました。夫の存命中に書き上げることはできませんでしたが、この本を読んだあなたにとって、自分と親とそして伴侶や子どものことを見直してみる糧となることを祈っています。

二〇〇九年三月